

子宮頸がんワクチンを男性にも HPV からパートナーを守る

日本人の死因の1番はがんで、4人に1人が亡くなっています。がんの中には、原因を除けば予防可能ながんがあります。排除可能ながんの原因は喫煙（受動喫煙を含む）、感染、飲酒です。

感染が原因で発生するがんには肝炎ウイルスによる肝がん、ヘリコバクター・ピロリ菌による胃がん、ヒトパピローマウイルス（HPV）による子宮頸（けい）がんがあります。これらのがんは感染を抑えれば予防可能です。ワクチンによる感染予防や治療法の確立で、肝がんや胃がんは減少しています。しかし、子宮頸がんだけは別です。

世界では、すでに子宮頸がんの罹患（りかん）率も死亡率も減少しています。先進国では、唯一日本だけが増加に転じています。子宮頸がんのほとんどはHPVの感染が原因です。

日本では、2013年以降のいわゆるHPVワクチン（子宮頸がん予防ワクチン）副反応報道とHPVワクチンの積極的勧奨の差し控えの影響でHPVワクチン接種率が激減し、HPV感染者が増加しています。

ワクチンを接種していないと、女性の50～80%が生涯どこかでHPVに感染します。HPVは性交渉で感染しますので、感染の機会は10代、次いで20代で多くなります。

HPVにはさまざまなタイプ（型）があり、がんを起こしやすいタイプや、そうでもないものがあります。なかでも「16型」と「18型」は、最も子宮頸がん発症リスクが高いタイプです。

しかも、この2つのタイプは若年世代の感染に多いのです。その結果、日本ではHPVワクチン接種を回避した世代を中心に子宮頸がんが増える可能性があります。同時に発症年齢が若年化し、子宮頸がんのピークが30代となり出産のピークと重なってきています。

子宮頸がんの予防には、「16型」や「18型」を含め、がんに関係する9つのHPVタイプに有効なワクチン（9価ワクチン）が使用できます。

■ 3回接種で90%予防可能

HPV感染の予防には、ワクチン接種を感染前（性交渉前）にすることが大切です。3回のワクチン接種で子宮頸がんを約90%予防できます。若い年代に接種すると抗体ができやすく、15歳までの接種では2回でもよいとされています。

これまでワクチン接種の機会を逃した人も26歳までは公費で接種（キャッチアップ接種）を受けることができます。副反応は重篤のものは少なく、軽度かつ一過性のものがほとんどで、安心して接種が受けられます。

HPVは子宮頸がん以外にもさまざまながんを引き起こします。肛門がんや膣がんもHPVが主な原因です。とくに最近急増しているHPV関連のがんは中咽頭がんです。この中咽頭がんは男性に多いがんで、ワクチン接種で予防可能です。

世界に目を向けると多くの国で公費による男性のワクチン接種が行われています。2020年末には日本でも男性へのHPVワクチン接種が認可されました。パートナーを子宮頸がんから守り、自らも守るため男性の定期接種を進める自治体も出てきました。HPVワクチン接種の先進的な国では、HPV感染率と子宮頸がん罹患率の大きな低下がみられ、集団免疫効果も観察されています。

子宮頸がんの制圧に向けて、16歳までに女性はむろん、男性もワクチン接種を受け、女性は20歳以降、子宮頸がん検診を受けることが大切です。